2023年2月12日　<u>朝 礼 拝 順 序　(午 前 10 時 半)</u>　　(№7)

司式　杉山昌樹牧師

前　　奏　　奏楽　五十嵐美代枝姉

開　会　招　詞　　詩編24編7－10節

＊ 賛　美　歌　　6:1（ソングシート）

1. 我らのみ神は 天地すべます、国々しまじま 喜びたたえよ。アーメン

＊ 開　会　祈　祷

罪　の　告　白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　　戒　　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　　(出エジプト20、申命記5)

＊ 賛　美　歌　　６：２（ソングシート）

2. みいつの光は 世界を照らせり、 大地はかしこみ み前にふるえり。アーメン

公 同 の 祈 祷　5　使徒信条

われは天地の造り主、全能の父なる神を信ず。

われは、その独り子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は、聖霊によりて宿り、おとめマ

リアより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、よみに降り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に座したまえり。かしこより来たりて、生ける者と死ねる者とを審きたまわん。
われは聖霊を信ず。聖なる公同の教会、聖徒のまじわり、罪の赦し、からだのよみがえり、とこしえの命を信ず。　アーメン。

献　　金　　（黒）教会活動　（赤）２・１１　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

聖　書　朗　読　　ルツ1章14－18節（旧約聖書422頁）

フィリピ２章19－24節（新約聖書363頁）

説　教・祈　祷　「一つ心のものとして」杉山昌樹牧師

＊ 賛　美　歌　８４:１－２

1. こころひとつに　いのろう。こころひとつに　うたおう。たがいのいのち　かがやかせ
ともにいきる　このひのために。

2. われらのいたみ　いのろう。ゆるしといやし もとめて。 たがいのいのち　いだきあい
ともにいきる　このひのために。

＊ 主　の　祈　り　　祈祷書1

天にます我らの父よ
願わくは御名をあがめさせたまえ
御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊ 頌　　栄　　６８

あまつみたみも、地にあるものも、父、子、みたまの神をたたえよ。アーメン

＊ 祝　　祷

後　　奏　　（黙祷）

報　　告 司会門脇陽子長老・受付門脇献一長老（次週：古澤純一・門脇陽子長老）

本日　受付　１階：那珂信之・星野房子執事　２階：藤井牧子執事　／ZOOMホスト・録音：大日南悠

次週　受付　１階：森永美保・加藤良明執事　２階：若月学執事　／ZOOMホスト・録音：番場験也

フィリピ2：19－24　「一つ心のものとして」

教会とは

いよいよフィリピ書も後半に差し掛かってきまして、今週と来週の個所は、パウロが二人の弟子を派遣する、というところです。一緒に扱ってもよかったかもしれませんが、今日は特に、テモテについて書かれたところを読みました。それは、ここで描き出されているパウロの思いに寄り添って、この個所を丁寧に読みたいと願ったからです。そして、それはほかでもなく、教会についてです。それも教会における信徒同士の関係、あるいは信徒と牧会者の関係について、このところがとても大切なことを語っていると感じられたからです。それは私たちの教会が例えば、今年のテーマであるこれからの上福岡教会を思いめぐらせる場合にも、決しておろそかにしてはならないことを示しているのではないかと私は考えています。

パウロの希望

そこでまず、今日の書き出しのパウロのことばを改めて確認します。「さて、わたしはあなた方の様子を知って力づけられたい」。なんだ、特別なことは言っていないじゃないか、と思われたでしょうか。しかし、実は今日お話ししたいのはほぼこの言葉についてです。なぜなのか、順番にお話しします。そもそも、この時点では、パウロは、捕らわれの身であったということは何度か触れました。例えば、1：16では「私が福音を弁明するために囚われている」との言葉がありました。実際今日の所の23節では、「自分のことの見通し」とありまして、捕らわれの身分に何らかの変化が、それもよい方の変化があるかもしれない、ということが言われています。しかし、それは全く確実とまでは行かないので、まずは、テモテを、そしてエパフロディトをフィリピの教会に派遣しよう、というようにこの19節から30節の部分で書かれているのです。そして、誤解を恐れずに言いますと、パウロがテモテを派遣するのは、自分のため、と言っていることになります。何しろ、「**わたしが知って力づけられたい**」というのですから。

互いを知る

しかし、パウロがこのように、自分が力づけられるために、テモテを派遣する、というのは、全くパウロの我儘なのか、と言いますと、そうでもないのです。それで、細かい話ですが、この所には翻訳で隠れてしまった言葉があります。それは「**私もまた**」という言葉です。**実は新改訳聖書では「わたしもあなた方のことを知って励ましを受けたいので」（岩波訳「私もまた元気になるために」）**とありまして、確かにパウロも力づけられるのですけれども、フィリピの人たちも、パウロとテモテによって力づけられる、テモテが、フィリピの人たちと話をする、そこで、パウロは囚われていても、元気で、そしてイエス様の話をすることで回りの様子を変えてしまっている、そのようなパウロの様子が伝わることで、フィリピの人たちが力づけられる、そしてテモテの話をファイリピの教会の人たちが喜んで聞いた、という土産話を聞くことで、パウロもまた、うれしくなる、このようにお互いがお互いの励ましになる、会って話をするということにおいて、そのままお互いの励ましになる、このように言っているのです。

私だけではうれしくない

このように、教会とは、ばらばらに集まったものではなく、むしろ、一つの群れとして生きていく、そのようなところのはずです。ところで、少し話が変わりますが、日本のキリスト教はまず武士階級から広まった、ということがよく言われます。確かにそのような傾向があったかもしれません。そして、武士と言えば武士道ですから、日本のキリスト教も、キリスト教道的なところがあるのかもしれません。それが、一概に悪いとも思いません。ただ、その場合に、わたしと神さま、私とイエス様、その間の深い関係、ということがまず前面に出てしまう傾向があるようにも思えます。かなり昔のことですけれども、他のキリスト者がどうであれ、自分が信仰をしっかり持っていればそれでいいのだ、というようなことを言う方と出会ったことがありました。自分さえしっかりしていればいい、教会の他の人がどうであれ、まずは自分だ、と言いたかったのかもしれません。

パウロを生かすもの

しかし、ここでパウロがはっきりと言っておりますのは、**自分の力の源はあなたがたフィリピの人たちだ、その信仰生活そのものだ**、という事実です。何しろパウロが力づけられるのは、「あなた方の様子を知って」なのです。あなた方がどう暮らしているのか、どのような信仰生活を送っているのか、それが知らされることで私は元気になる、というのです。なぜでしょうか。先週お読みしましたところに、こんな言葉がありました。「こうして私は、自分が走ったことが無駄ではなく、労苦したことも無駄ではなかったとキリストの日に誇ることができるでしょう」。ここでパウロは、いきなり、自分が神様の前に立つことを考えているようです。黙示録では終わりの時に、一人一人が神様の前に立たされるという場面があります（黙示20：12以下）。恐らくパウロが言っているのはそのような神様による評価についてです。そこで私のしたことは無駄ではなかったと言ってもらえるだろう、というのです。フィリピの教会の人たちが、神様を恐れつつ喜んで生きている、そのことは、自分の救いと一体だ、というのです。いわば、一蓮托生です。この事は何もパウロだけの話ではありません。伝道者と教会員は一蓮托生、運命共同体です。

親身になって

それゆえ、パウロが生きている信仰、それは一人で信仰の深みを追求するというものではないのです。むしろ、信仰に深く生きることは、他の信仰者と一緒に生きていくこと、という方向性を持っているのです。そして、実はそのことが、このところでテモテを派遣する理由として語られている、いくつかの言葉からも分かるのです。20節を見ますと、テモテのように私と同じ思いを抱いているものは他にいない、ということがまず言われています。何が同じなのかと言いますと、そこにある通り「親身になってあなた方のことを心にかけている」という点でです。まさに、親のような心で、とあるのですが、しかし、それは単に肉親の情だけではありません。むしろ、21節にあることが重要です。ここでは、他の人、ということが言われておりまして、まるでテモテ以外の人が全員ダメ、とでも言わんばかりの勢いですが、おそらくそのような意味ではありません。もし、他の人が全員ダメなら、ペテロは、ヤコブは、ヨハネは、という話になりますし、そもそも、来週語りますエパフロディトはどうなのだ、という話になりかねません。ですから、このところの「他の人」という言葉は、とりあえず今派遣できそうな人たちの中では、エパフロディトとテモテがふさわしい、くらいのことを言っていると理解したいのです。

イエス・キリストのこと

とはいえ「他の人」の話はこのくらいにしまして、21節の本筋に戻ります。この所の書き方からしますと、他の人たちは自分のことを追い求めていた、とあるのに対して、パウロ、テモテ、エパフロディトといった人たちが追い求めていたのは何か、と言いますと、イエス・キリストのことだ、ということになります。ここで大事なのは、イエス・キリストのこと、という部分です。これは、そのまま、イエス様が求めていること、と言っても間違いありません。そして、イエス様が求めておられるのは間違いなく、わたしたちが、救われること、わたしたちが、神様の民として、喜んで生きていくことです。**<u>イエス様は「私は命のパンである」</u>**（ヨハネ6：35）と言われました。私たちを生かすためにご自身を与えられるのがイエス様の心です。それで、先ほどの20節の言葉に戻ります。パウロが、「私と同じ思い」ということを言います時に、それは、このような意味で、イエス様と同じ思い、ということを含んでいるはずです。そして、パウロは、このことを、フィリピの教会の人たちにも見出しているのです。すなわち、ここでは、パウロと、パウロが派遣するテモテ、あるいはエパフロディトと、フィリピの教会に集まっている人たちが、このイエス様の思いによって一つにされている、ということがそもそもの大前提としてあったのです。そうだろうか、と思われるでしょうか。教会はいろいろで、教会に集まる人も色々ではないか、と思われるでしょうか。けれども、その点では、もう一つ確かめたい言葉があります。

テモテのふさわしさ－会衆に認められる

それは、22節の「テモテが確かな人物であることはあなた方が認めるところであり」という言葉です。テモテは使徒言行録を見ますと、パウロの第二次伝道旅行の途中からチームに加わって、フィリピやテサロニケにも長く滞在したことがわかります。それこそフィリピの人たちは、彼と長い年月を共にしてきたのです。22節の後半では、「息子が父に仕えるように、彼は私と共に、福音に仕えた」とあります。実際に、どのような活動をしたのかまでは書いてありませんけれども、テモテがパウロと一緒になって、忠実に教会に仕える様子を、フィリピの人たちは見てきた、というのです。そして、そのような年月に耐える仕え方、働き方を確かにテモテはしていて、そのことを、フィリピの教会の人たちは見てきたのです。「あなた方が認めるところ」という言葉は、重要です。教会はその点でごまかされないのです。わたしたちが教会をどのように見ているかよりももっとはっきりとしていることがあります。それは、教会は、神様のご支配されるところであり、また、そこで認められるということは、神様の御心において、認められるということです。少なくとも、わたしたちが、教会の会議を信頼する根拠はそこにあります。

同じ思い

全くその意味で、わたしたちは、決してばらばらの存在ではありません。私たちは、一見別々に生きているようでいて、教会として生かされています。そして、その点で、わたしたちは、みな同じ思いを持つものとされているのです。そして、実は、このようにして、パウロと、テモテと、エパフロディトと、そして、わたしたちが、同じ思いを持っているからこそ、そこでまじわりということができてくるのです。そして、そのようなまじわりにおいて、力づけられる、元気をもらう、ということが起きてくるのです。それで、最初に、信徒同士の関係、信徒と牧師の関係、ということをお伝えしましたが、それは、個人的な関係ではありません。むしろそうではなく、このようにして、神様のご支配の中で、造られていく、その中で生きていくのが、私たちの関係です。そして、その中で、互いに認め合い、お互いの信頼の中で生きているのが、私たちです。ある人を確かだと認めうる群れは、その群れもまた確かです。そこに神様の御心が働くのです。

一つ心のものとして

そのようにして、私たちはお互いに確かにされた者として、互いの様子を知らせ合うことができます。そのようにして、互いの様子を知って、互いに励ましを受け、力づけられていくことができます。そのようにして、私たちは一つ心のものとして、一つの群れとして、あるいは、これを中会に、あるいは全改革派教会に広げて、互いの様子を知らせ合い、喜び合って生きていくことができるのです。

祈り

父なる神さま、あなたはご自身の全く自由な御心のままに、恵みとして、私たちをみもとに集め、一つの群れを起こして下さり、これを養い育ててくださいますから感謝します。私たちは、それぞれの時に、それぞれの事情に従って集められましたけれども今は一つのキリストの体とされています。どうぞ、この与えられたまじわりを共に喜び、互いを励みとして生きていくことができますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン